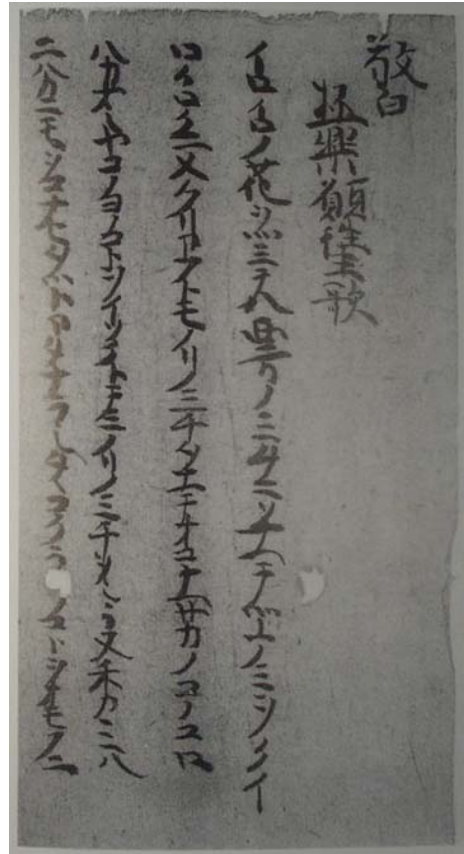
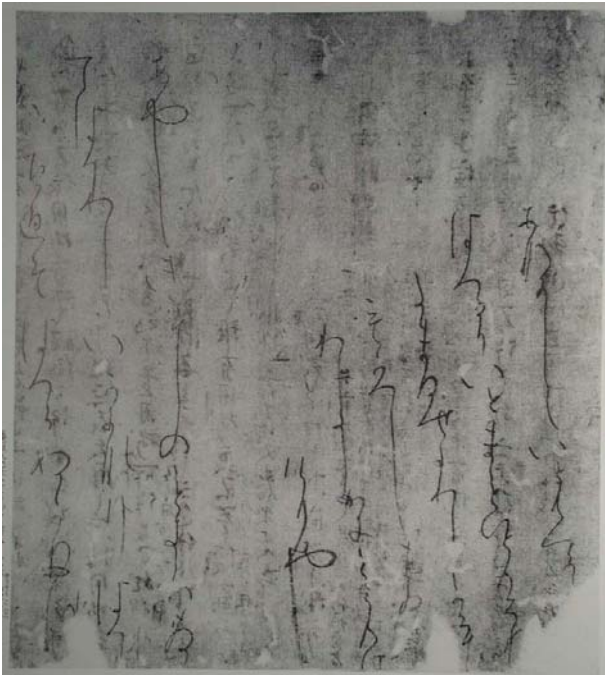


## 日本の平仮名と片仮名（漢字系文字・派生）

■以下、左は平仮名の資料、右は片仮名の資料である。

左は藤原公任筆の“北山抄紙背仮名消息”（997年頃）。右は僧西念（1100-1142）“極楽願往生歌”。『季刊墨スペシャル 12 図説日本書道史』の61頁と84頁によった。



■日本の仮名には、万葉仮名の草書体より発展した平仮名と、万葉仮名の部分より発展した片仮名がある。これは漢字の字形を変えて新しい文字組織を作ったものである。派生文字の典型といえる。

- ・「安 以」などの漢字の草書より「あ い」などができた。万葉仮名の草化。
- ・「阿 伊」などの漢字の偏より「ア イ」などができた。万葉仮名の省文。

共に9世紀から資料があるという。これらは、日本語の音節を表記する文字として組織された音節文字であり、文脈の力を借りずに意味を担うことはない。なお、上の写真をみると、平仮名が意味の単位毎の連書を指向しており、片仮名は放ち書きを指向していることがよくわかる。

■成功の因。この平仮名と片仮名は長い歴史を持っており現在でも正式な文字として使用されている。これを比喩的にいえば、旺盛な生命力を保ち続けている文字であり漢字系文

字の中の奇跡といってよいであろう。日本の平仮名や片仮名ほどの成功を収め得た漢字系文字は他に類似例がないわけであるが、成功の因はどこにあったのであろうか。林 1977には次のようにある。“万葉仮名が機能的に漢字を表音に限定してその意味から離れたことが、字形のうえでも本来の字体を離れて簡略化を極限にまで押し進めることを可能にしたのであり、また実用的な体系として字母の範囲がととのえられることがそれを支えたともいうことができるわけで、このような意味では、平仮名・片仮名の発生の契機は、すでに万葉仮名の中に胚胎していたのである” (p. 176)。一定の字母数に抑えられた万葉仮名の成立に後の平仮名・片仮名成立の遠因があるとする。そして、成功の因もあったのであろう。なお、万葉仮名を一定の字母数に抑えることができたのは、表記されるほうの日本語の音節構造が比較的簡単なものであったことが幸いしたのであろう。日本語は当時であっても、音韻論的に二重子音や音節末子音を持たないものであったはずであるから、漢字を表音節記号として利用することに大きな困難はなかったはずである。また、歌謡は第一義的には和語による音声言語であり、この歌謡の表記をとおして用字法を練ることができたことも幸いしたのであろう。

参考文献〈発行年順〉

林 史典 1977. 「日本における漢字」, 『岩波講座 日本語 8 文字』東京: 岩波書店, 159-208 頁。

大坪併治 1977. 「片仮名・平仮名」, 『岩波講座 日本語 8 文字』東京: 岩波書店, 249-299 頁。

季刊墨編集部 1992. 『季刊墨スペシャル 12 書を学ぶ人のための図説日本書道史』東京: 芸術新聞社。

築島 裕 2001. 「仮名」, 『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』(河野六郎・千野栄一・西田龍雄編著) 東京: 三省堂, 2001 年, 228-235 頁。

(文責: 吉池孝一)